

- 年頭所感 -
社会福祉学はこの時代の希望を見いだす | 年に

一般社団法人日本社会福祉学会 会長 空閑 浩人(同志社大学)

大変な年明けとなりました。

1月1日に発生した能登半島地震によって、甚大な被害がもたらされています。被災地の人々が、2024年が良い年になることを願いつつ、それぞれの場所で新年のはじまりを迎えていたと思うと、とても心が痛みます。徐々に明らかになる被害の状況に触れるにつれて、自然の驚異にあらためて圧倒されるとともに、それでも、どうして元日にこのようなことが、と思わずにはられません。

犠牲となられた方々に深く哀悼の意を表します。また、被災された皆様に心よりお見舞いを申し上げます。そして、被災者の救済と被災地の復旧にご尽力されている方々に深く敬意を表します。被災地域の皆様の一日一日をしのぐ毎日に思いを馳せ、一日も早く安全と安心が確保されることを心よりお祈り申し上げつつ、自分ができること、なすべきことを実行していきたいと思えます。

そして、昨年につき、今年も年明けから戦争のニュースが続いています。解決の糸口が見えないまま、パレスチナ自治区ガザ地区では戦闘開始から4ヶ月がたち、ウクライナの戦争も3年目に入ろうとしています。多くの子どもや市民の犠牲が未だ後を絶ちません。国籍や宗教、文化や言語の違いを超えて互いに尊重しあう社会の実現、争いを決して軍事力ではなく、ひたすら話し合いを重ねることで解決するという道の遠さを感じています。自ら平和を壊す人間の愚かさを痛切に感じつつ、そして自らも同じ人間であることを覚えつつ、しかしそれでも人間性への信頼と解決の可能性をあきらめず、人間の英知を結集して、なんとかこの状況が一刻も早く終わって欲しいと祈る毎日です。

私たちの生活は、2020年の新型コロナウイルス感染症の拡大以降、様々な制限のなかにはありました。そして、昨年になってようやくコロナ前の日常を取り戻したように見えます。しかしながら、明るい話題ばかりではありません。コロナ禍の日本で顕在化した孤独・孤立の問題や生活困窮の問題は、一層深刻化する状況にあります。11年ぶりに増加したと報じられた2020年の自殺者数の内訳では、特に女性と子どもの数が顕著に増大したことが示されています。この傾向が続くなかで、2022年には小中高生の自殺者数が500人を超えて、統計史上最多を更新したとされています。孤独や孤立の問題は、今や生命にかかわる問題です。社会の一員として、すなわち地域の、職場の、学校の一員として、あるいは家族の一員として、人や場所とのつながりのなかで生きるという、その基盤となるものが脅かされ、多くの人々が深い孤独や孤立を強いられる状況があります。

人が生きるとは何か、いのちとは何か、生活や暮らしとは何か、それが支えられるとはどういうことかが問われていると思います。私たちが研究、教育、そして実践する社会福祉学とは、人と社会の新たな価値観を創造するとともに、そのような価値観に基づいて連帯し、行動する学問でなければならないと思います。人々の交流や対話を大切にして、人や社会のゆとりや寛容さの維持や回復に貢献する学問でなければならないと思います。それは、人々の福祉を保障する制度や施策のあり方を議論する学

問であるとともに、身近にいる一人の苦しみや生きづらさに気づき、その声に真摯に耳を傾けて、かかり続ける実践の学問でなければならないと思います。そのために、人々の間に壁をつくり、隔てる言葉ではなく、多様な人々をつなげて包摂する言葉を、数多く生み出して発信できる学問でなければならないと思います。このことは、社会福祉学の研究や教育、実践に携わる私たち学会員の責任であり、かつ使命でもあると思います。

1954年5月の日本社会福祉学会の設立から、今年で70周年を迎えます。昨年開催された第71回秋季大会のテーマは、「世界の幸せをカタチにする社会福祉学の挑戦」でした。私たちの生活は、各地での災害の発生や生命の危機にもかかわるような気候変動、またICTやAIの発達など、社会状況のめまぐるしい動きのなかにあります。複雑で不安定な時代である今こそ、社会福祉学に、この学会に、そしてそこに携わる私たち一人ひとりにおいて、様々な「挑戦」が求められていると思います。70周年という節目の年にあたり、先人たちによって築かれた歴史とその知にあらためて学びつつ、「何のための社会福祉学であり、何のための社会福祉学会なのか」という本学会の存在意義を問い直し、今後の展望を描くさまざまな議論と新たな挑戦の機会となる1年になることを願います。

人間とその生には尊厳があります。その尊厳が冒される様々な状況に対して、社会福祉学は徹底して抗わねばならないと思います。そのためにも、今一度学問としての社会福祉学の原理に立ち返り、社会福祉学への姿勢を新たにしたいと思います。そして本学会が、この時代に求められる社会福祉の「知」の生成の現場となり、既存の知を問い直し、社会福祉学の発展と新たな実践の創造につながる場となることを願います。そして、社会福祉学が人と社会の幸せに貢献する「生きた知」の体系として、学会員をはじめとする多くの方に共有され、磨かれ、継承される場となることを願います。

そして、社会福祉学という学問があること、その学問に携わる私たち学会員がいること、その研究や教育、実践に日々携わる人々がいることは、様々な社会問題や生活問題を抱える今日の状況において、大切な希望であると思います。人々の尊厳ある生を決して諦めない社会福祉学に、この時代の希望を、一つでも多く、皆様とともに見出していきたいと思います。

学会員の皆様の、この1年のご健勝を心からお祈り申し上げます。

2024年も、本学会の各事業へのご支援とご協力のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

韓国社会福祉学会 2023 年度韓国社会福祉共同学術大会 研究発表報告

東京福祉大学大学院
佐々木 隆志

日本のデイサービスにおける「おりがみ」活用と生きがい創出の研究

本研究に、貴重な発表の機会を提供して下さい、日本社会福祉学会理事の先生方及び韓国社会福祉学会大会運営に関わった多くの諸先生方に深く感謝申し上げます。

2023年10月20日韓国済州国際コンベンションセンターでの報告は、私共の長い研究生活の中で最高の思い出となり、ありがとうございました。

【発表の動機】

第一に、筆者が進めている認知症の方々を対象にした「おりがみりハビリ」研究を世界に発信したい点。第二に、身近な素材（おりがみ）で、高齢者の生活の質を高め介護予防に寄与したい点である。

【研究概要】

本研究は、デイサービスを利用している認知症高齢者について、二つの群に分け「おりがみを活用した群」（N=129）と「おりがみを活用しない群」（N=108）で、おりがみ活用前とおりがみ実施後の身体に関する11項目についてアンケート調査を実施した。調査は、日本全国にデイサービスを持つ会社と、おりがみ会社及び静岡県立大学短期大学部佐々木研究室の三者が産学連携協定書の締結によって実施した。

【考察】

おりがみを実施群と未実施群に分け、おりがみ実施前後の質問項目に対して、対応のあるt検定を行った。11項目の質問のうち、おりがみ実施群における「他人と話をする機会があるか」のみ統計的に5%水準で有意な結果を得た。また、この質問項目は正の方向に有意であった。おりがみ実施群において、おりがみを行う前よりも後の方が「他人と話をする機会」が多くなった。おりがみ未実施の群においても、おりがみ以外のデイサービスの活動をしており、おりがみを実施群のみで統計的に有意な結果を得られたことは大きな発見である。

【質疑応答】

南ソウル大学教授から、事前に質問がメールで届いた。1. おりがみに参加者した人数に関する質問。2. アンケートツールに関する質問。3. 独立変数に関する質問（おりがみ利用期間と頻度、レベルに関する詳細など）。4. 測定方式に関する質問などである。質疑のなかで、調査中はデイサービスに通所から入院された方、デイサービスを利用しなくなった方や認知症以外の疾病を抱えていた様々な高齢者がいた。質問内容から、調査場面及びおりがみの取り組み過程、難易度、調査期間など更に詳細に述べる必要があったと反省している。南ソウル大学チャン・ドンホ教授は、筆者が述べた「今後、高齢者のあるままの存在を認め、残存機能を活用する取り組みプログラムが必要となります」という意見に全面的に同意した。さらに「今後、折り紙のように比較的低コストで、同時に効果的なプログラムがもっと開発されることを願っています」と述べられた。

本研究は“Study of End-stage Care Management in Japan”中央法規出版、科研費補助金【特定学術図書】（課題番号：255161）PPI-237（2014）」成果の一部である。

韓国社会福祉学会 2023 年度韓国社会福祉共同学術大会 研究発表報告

東洋大学福祉社会開発研究センター
門下 祐子

この度、2023年10月20日・21日に済州国際コンベンションセンターにて行われた、韓国社会福祉学会2023年度韓国社会福祉共同学術大会の発表者にご選考いただき、国際自由発表部門にて発表の機会に恵まれた。タイトルは、「知的障害者における『性』に関する学びのあり方—わかりやすい発行物の日韓比較を通して—」であり、知的障害者を主な対象とし「性」についてわかりやすく説明している書籍や冊子などの発行物について、日本と韓国の事例それぞれ2冊の調査結果を発表した。本研究は、羽山慎亮氏（一般社団法人スローコミュニケーション）と共同で行ったものである。当日は羽山氏も同席のもと、韓国語の通訳を金永光氏に依頼した。当日の発表まで様々にご尽力くださった金氏に、この場をお借りして心より御礼申し上げる。

研究目的は、発行物の内容や「性」に関する規範がどの程度扱われているかを調査すること、そして知的障害者における「性」の学びのあり方を検討することであった。その結果、日本の発行物は、「性」に関するトピック（月経・マスターベーション・恋愛・セックス・子育てなど）を網羅的に記載していたが、韓国の発行物は「恋愛」に焦点化し、パートナーとの関係性の構築などについて示していた。いずれの発行物も異性愛を前提とした記載が中心であったが、日本の発行物のほうが一つの固定的なライフコースを示しつつ、規範にそった行動を促す傾向が強いことが窺えた。これらの結果をふまえ、各発行物の特徴やその背景にある考え方・規範について、支援者・教育者らが批判的に考察していくことの必要性を提言した。発表後は、指定討論者である南ソウル大学社会福祉学科の張東虎教授から、「他に動画などもある中で、あえて発行物に関心を持った理由は？」「『わかりやすい発行物』の定義とはなにか？」「日本では、知的障害者が恋愛しているにもかかわらず結婚にはつながっていないように思う。さらに『性』に関して彼らが自己決定することに反対の声があると聞いている。この点について日本で賛成・反対する人の意見を教えてほしい」といった3つの質問を受け、それに対する回答を述べた。終了後は同じセクションで発表した北海道大学大学院の研究者やソウル大学大学院の方からも、コメントやご質問をいただき、重要な示唆を得ることができた。

学会期間中は、韓国の社会福祉教育の現状や農村地域における発達障害者支援の課題等の発表を聞き、次なる研究のアイデアが浮かぶなど、研究へのモチベーションが上がる契機にもなった。あらためてこのような素晴らしい機会をくださった日本社会福祉学会、そして研究発表をご支援くださった東洋大学福祉社会開発研究センターに心より感謝申し上げます。

今回の経験及び培ったネットワークをもとに、今後も研究を深めていく所存である。

韓国社会福祉学会 2023 年度韓国社会福祉共同学術大会 研究発表報告

北海道大学大学院教育学研究院
張 思銘

この度、日本社会福祉学会の審査を受け、済州島にて開催された韓国社会福祉学会の大会（2023年10月20日～21日）において、自由研究発表をさせて頂きました。ご機会を頂き、誠にありがとうございます。

今回の参加にあたり、日本をフィールドにした研究について、韓国の研究者から貴重なコメントを頂き、新鮮で興味深い刺激を受けました。中国人である私にとって、中日韓の交流がこれから大変重要なものとなると思われました。また、同じような課題を持つ欧米諸国の研究についても紹介して頂き、今後の理論展開や研究方法等について、国際的な視野を広げることができました。

さらに、国際的な研究の雰囲気味わうだけではなく、この機会を通して、同じ発表者である日本の優れた研究者とも出会い、とても充実した、良い経験となりました。

今回、私の発表テーマは「日本における高齢寡婦世帯の経済的不利—生活戦略から見るシングルマザーの老後生活における貧困への対応」（科学研究費助成金23K18823）でした。研究の対象者は、日本の高齢寡婦世帯で、ひとり親、女性、高齢者という貧困リスクを高める要因をかかえ、貧困に陥る可能性が高いと考えられます。インタビュー調査の調査協力者は、X市の母子福祉団体Yに所属する、当時65歳以上で、年金を受給し、要介護の状態ではない、合計16人の高齢寡婦です。高齢寡婦が経済的不利に対処するために、就労や成人子の扶養、生活保護を受給するなどの戦略を取る一方、それだけでは所得不足を解消できない場合、支出の面で我慢せざるを得なくなる実態を明らかにしました。最後に、高齢寡婦の貧困は、資源が少ない中で、可能な限り合理的な選択の結果であったが、その選択は、経済的不利と制約された選択肢の中で行われるため、貧困から抜け出すまでには至らないと分析しました。

上記の発表内容を踏まえ、ソウル大学社会福祉学科のパク・ジョンミン先生から、日本の高齢寡婦世帯の生存戦略が韓国の高齢者の生存戦略と、大きな違いがないというコメントを頂き、また、欧米諸国の研究についても紹介して頂きました。自分の研究が、東アジアだけでなく、世界中の共通課題として重要な価値を持つことを改めて認識しました。

最後に、本研究について、ご指導を頂いた北海道大学大学院教育学院の松本伊智朗教授、辻智子教授、鳥山まどか准教授、北翔大学短期大学部保田真希准教授に深謝しております。また、今回発表にあたり、原稿翻訳を担当して下さった安鑫丹さん、現場で通訳して下さった祁暁航さん、そして、韓国社会福祉学会大会開催関係者および日本社会福祉学会関係者を含む、多くの方々のご協力を頂きました。心より、御礼申し上げます。



地域ブロック情報



日本社会福祉学会には7つの地域ブロックがあり、それぞれに特徴的な活動が展開されています。今号では、関西地域ブロックおよび中国・四国地域ブロックの活動についてご紹介いたします。

関西地域ブロックから

関西地域ブロック担当理事
所 めぐみ(関西大学)

関西地域ブロックは、年次大会・総会(例年2月か3月)の開催、若手研究者・院生情報交換会の開催(年に3回程度)、機関誌『関西社会福祉研究』(年1回)の発行を主な研究活動として活動しています。年に数回開催する理事会と理事会MLにより適宜検討や情報交換をし、会員のみなさまのご協力によりこうした活動等について計画的に進めています。

今年度の主な活動をご紹介します。

○2023年度年次大会・総会

日程:2024年3月2日(土)

テーマ:「幸福としての福祉へ 増進型地域福祉を手掛かりに」

会場:桃山学院大学 和泉キャンパス(3号館・2号館)

午前中には自由研究発表を行います。

詳細は学会HPをご覧ください。

https://www.jssw.jp/wp-content/uploads/kansai_2023_info.pdf

○若手研究者院生情報交換会

各回の企画は、理事会メンバーを含む会員が担っています。このうち年に1回は、若手研究者・院生会員が企画を担当しています。以前は関西ブロック内の大学院に持ち回りのこの1回の企画を担っていただいていたのですが、最近、留学生・国際枠として、(元)留学生の若手研究者の方々による企画を年に1回実施することが定着しています。今年度については全国のCSNETとの共催企画もあります。

第54回は、対面開催で院生を中心に32名のご参加を頂きました。参加者間の交流を進めるための名刺交換会も行われました。

- ・日程:2023年12月9日(土)14:00~17:00
- ・テーマ:社会福祉研究におけるデータ収集と分析のポイント
- ・会場:花園大学 返照館 200 教室

第55回は、日本社会福祉学会研究支援委員会第4回CS-NETサロンとの共催で実施します。終了後には会場近くで懇親会を行い、交流を深めます。

- ・日程:2024年2月11日(日)14:30~17:30
- ・テーマ:初期キャリア研究者にとっての共同研究の意義-可能性、苦悩、戦略-
- ・会場:同志社大学
- ・開催方法:対面及びオンライン(ZOOM)

第56回は、近日中に学会HPと関西地域ブロック会員MLにてご案内いたします。

- ・日程:2024年3月17日(日)14:00~16:30(予定)
- ・テーマ:海外での学びと研究の意義-異なる文化や環境下での研究体験から得られるもの-
- ・会場:大阪公立大学杉本キャンパス 杉本図書館10階 研究者交流室

○機関誌『関西社会福祉研究』

今年度末に第10号を発刊予定です。毎年1回年度末の3月に刊行しています。

なお投稿論文の締め切りは、毎年8月の末日です。関西地域ブロック会員のみなさまのご投稿をお待ちしております。

会員のみなさまとともによりよい活動ができますよう、今後も引き続き会員のみなさまのご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

中国・四国地域ブロックから

中国・四国地域ブロック担当理事
山本 浩史(新見公立大学)

中国・四国ブロックの主な活動は、会報および機関誌の発刊、そして、ブロック大会の開催です。会報と機関誌については、本学会ホームページの「地域ブロック情報」にも掲載しております。よろしければご高覧ください。

各ブロックにおいても同様だと思いますが、特に活動の中心となるのが、ブロック大会の開催です。私が担当理事になってからの大会ですが、就任直後は新型コロナウイルス感染症の蔓延で大会開

催が延期となり、翌年、第52回大会・岡山大会（川崎医療福祉大学）が初めてのオンライン方式により開催されました。大会テーマは「社会福祉から、人の『はたらく』を問い直す」であり、基調講演も同じテーマで行われ（講師：川本健太郎氏・神戸学院大学）、シンポジウムは「社会福祉から、人の『はたらく』を問い直すー中四国地方での実践事例からー」と題して行われました。

次の第53回大会・岡山大会（対面・ノートルダム清心女子大学）では「家族の変容とソーシャルワーク」をテーマに基調講演は「家族の変容とソーシャルワーク～市井の人々とともにあり続ける創造的な研究と実践を考える～」（講師：空閑浩人氏・同志社大学）、シンポジウムでは「ヤングケアラーの支援と課題」が取りあげられました。

そして、今年度の第54回大会・島根大会（対面・島根大学）では、豪雨という悪天候のなかでの開催となりましたが「地域における包括的な支援体制づくり」をテーマとし、基調講演では「人口減少時代の地域再生」（講師：田中輝美氏・島根県立大学）と題した講演が行われました。次年度は山口県（山口県立大学）での開催を決定しています。大会プログラムは開催校により立案されますが、このように改めて、大会や基調講演、シンポジウムのテーマを並べてみると、その時のタイムリーなテーマや今、地域で抱えている課題が取りあげられてきたことがわかります。また各大会では自由発表のほか特別分科会を設定しています。たとえば第52回大会から第53回大会では、「福祉人材確保」、そして、第54回大会からは「社会的養護の現状と今後ー家庭養護への移行に伴ってー」といったように、地域での特化した福祉課題や今、求められている研究にも取り組んでいます。

中央と地方といった言い方がいいとは思っていませんが、地方にあっても学术交流を盛んにし、会員相互が研鑽を深める場となるよう、地方の特性を活かしたブロック運営を手掛けていくことが大切であると思っています。

アメリカの人種と貧困

～『ルーツ』から考える～

木下 武徳

立教大学

ご存知の方も多いと思いますが、アフリカから黒人奴隷として連れてこられたクンタ・キンテとその血筋の小説家であるアレックス・ヘイリーにつながる子孫がどのように生きてきたかを示した『ルーツ』という小説・ドラマがあります。コロナ禍の直前でしたが、アメリカの黒人に対する警察の不当な差別や殺害が問題になり、Black Lives Matterのデモが日本でも大きく報道されました。黒人奴隷は終わったのかもしれませんが、黒人への差別の問題は終わっていないようです。私の黒人である友人はアメリカでは毎日何か対応を間違えると逮捕されたり、撃たれたりするかもしれないと不安に思いながら暮らしているけど、日本に来るとそういう心配がないから日本に住みたいと言っていたことを覚えています。日本でも差別はあるとは思いましたが、たしかに撃たれる心配はかなり減るとは思いました。

アメリカのロサンゼルスに2000年に初めて行ったときの印象では、マネージャー層には白人、バスの運転手や郵便局、その他接客業は黒人、ハウスキーパーや庭の剪定、露天商はヒスパニックの人が多く、人種によって階層化されているのだなと思いました。『Poverty in the United States, 2022』(U.S. Census Bureau, 2023)によれば、貧困層に占める人種ごとの割合は、白人44.0%、ヒスパニック28.4%、黒人20.1%でした。ただ、人口に比してヒスパニックや黒人の貧困の割合は10ポイントほど高くなっていましたので、人種というものがやはり貧困に影響していそうです。

ただ、2010年にアメリカに滞在する機会を得てロサンゼルスにいたとき、5月18日の『ロサンゼルス・タイムズ』(以下LAT)に大変面白い記事が出ていました。「In search of the meaning of 'Mozingo」(「モジング」の意味を求めて)です。LATの白人の記者だったJoe Mozingo氏が、自分の名字が珍しいので調べてみたという記事です。Mozingoはイタリアっぽいからイタリアの先祖かとも思いながら調べてみたら、なんと財産目録で黒人奴隷だったことがわかったという話でした。他の黒人奴隷は名字も英語風に変えられたのですが、アフリカの貴族だったのでそのまま名字を使うことを許してもらえたということでした。元々は黒人でしたが、途中で白人との子どもができ、徐々に白人の血筋になったということでした。別の血筋のアメリカの南部に住む遠い白人の遠い親戚が白人至上主義団体KKKを支持していたので、あなたの祖先は黒人ですよと教えたらとても怒られたという話も紹介されていました。また、別の血筋で1960年ごろに生まれたMozingo兄弟は「Mixed」の親から生まれ、兄は白人のように見え、弟は黒人に見えました。弟は黒人差別を受けながら生きてきたけれども黒人コミュニティに入りアイデンティティが保たれ、兄は黒人からは白人だ、白人からは黒人だと言われ、どこにも所属できず孤立していることが紹介されていました。

2022年にアメリカに行ったときに、たまたまホテルで見たテレビで、日本のNHKの『ファミリーヒストリー』のような番組で、一般の人の申し込みでルーツを探り、教えてくれるという番組がありました。依頼人は白人のように見える人でしたが、その人の祖先も黒人奴隷に行き着いたということでした。結構びっくりするようなことだと思うのですが、本人があまり驚いていないことが印象的でした。LATの報道もあたりしだったので、もうあまり驚かれるようなことではなくなっているのかもしれませんが。

この番組をアメリカの友人に話をしたら、日本人の血筋のある友人を知っているが、その人はおじいさんがイタリア人と結婚し、その娘である母はフランス人の父と結婚し、その友人はまた他の国から来た人と結婚するので、いまは国別のルーツを強調して日系だとかイタリア系だとかいうのは意味がなく、「アメリカ人」というのが一番だと言っていました。さすが移民の国、アメリカだと思いました。

実は日本も長い視点で見れば同じだったのかもしれないと、昨年末に放送されたNHKの『日本人とは何者なのか?』を見て思いました。それによれば、東京に住む日本人の縄文DNAの割合は1割でしかなく、その後多くの渡来人=移民が来てそちらの影響の方が断然に大きいということでした。アイヌの人は縄文DNAが7割あるそうで、DNAとしていえば、アイヌの方が本来の日本人なのかもしれません。長い歴史を見れば、日本も移民の国なのではないかと思いました。

2023年2月に立教大学でニューヨーク市立大学のジェームズ・マンディバーク先生にアメリカの貧困に関する講義をしていただきました。そのなかでアメリカのロサンゼルスにあるマンハッタンビーチの一部は1912年に黒人から市が強制的に摂取したのですが、2022年にその子孫に返還し、子孫はそのビーチを市に売却したそうです。結果として、金銭的な補償をしたということです。2019年に連邦最高裁判所はオクラホマの土地の半分はネイティブ・アメリカンの土地だと判決をだしたそうです。そして、貧困のような構造的な問題は構造的に解決すべきであるとマンディバーク先生は主張されていました。2023年7月にオランダ国王が奴隷制について謝罪をしたというニュースがありました。子どもの貧困の連鎖が日本でも問題になっていますが、こうした連鎖と続く貧困の問題を考えると、重要な視点を得られたと思いました。

アメリカ、日本でも人種的に不利にある人や外国人への支援のあり方については、こうして長い歴史でルーツを見てみると、人を差別する理不尽さとその回復がいかに重要なのかを痛感させられます。



メリーランド州アナポリスのアレックス・ヘイリーの像（筆者撮影）

2023年度第3回理事会報告

開催日時:2023年10月13日(金) 15:00~17:00

開催場所:吉祥寺ホテルエクセル東急7階フォレスト(東京都武蔵野市吉祥寺本町2丁目4番14号)

I. 会長挨拶

定刻となり、空閑浩人会長より挨拶があった。

II. 理事会開会宣言(欠席理事の確認)

定款第42条に基づいて空閑会長が議長となり、出席理事および欠席理事を確認した。定款第43条に規定されている要件を充足したため、「2023年度第3回理事会」を開催するとの宣言があった。なお、定款第47条に則り、議事録署名人として空閑会長、大島監事、岡部監事を選出した。

III. 審議事項

第1号議案 入会審査

総務担当木下理事より、回覧資料に基づき説明があった。審議の結果、17名全員の入会が満場一致で承認された。

第2号議案 学会賞審査委員の委嘱について(理事会ML審議済)

総務担当木下理事より、次期学会賞審査委員の委嘱について説明があり、審議の結果、継続委員4名および新規委員5名の計9名に委員委嘱をすることが満場一致で承認された。

第3号議案 「一般社団法人日本社会福祉学会旅費規程」の改定について

財務担当室田理事より、一般社団法人日本社会福祉学会旅費規程の宿泊費について、世情に沿った適正な宿泊上限額へ改正する案が提議され、審議の結果、満場一致で承認された。

第4号議案 「一般社団法人日本社会福祉学会謝金支払い内規」の改定について

財務担当室田理事より、翻訳謝金およびネイティブチェック謝金の金額設定が据え置きとなっていることから、増額の方針で見直しの検討を進めることが提議された。審議の結果、今期役員の任期中に「一般社団法人日本社会福祉学会謝金支払い内規」を改定することが満場一致で承認された。

第5号議案 「一般社団法人日本社会福祉学会名誉会員規程」の改定について

一般社団法人日本社会福祉学会名誉会員規程にて「全国大会への参加費が免除される。」と規定されているが、総務担当木下理事より、その適用範囲を地域ブロック主催の研究大会等にまで拡大する案が提議された。事前に各地域ブロックで検討を行い、異論がなかったことを確認した。審議の結果、適用範囲を拡大することが満場一致で承認された。なお、本規程の変更は総会での決議を

経る必要があるため、2024年度定時社員総会に上申予定である。

第6号議案 中国・四国地域ブロック役員任期終了について

杉山理事より、中国・四国地域ブロック研究担当（第54回大会担当）の任務終了により、その任を解くことが提議され、審議した結果、満場一致で承認された。

第7号議案 2025年度秋季大会開催校について

空閑会長より、2025年度（第73回）秋季大会の開催校を同志社大学に依頼したとの説明があり、審議の結果、満場一致で承認された。

第8号議案 後援を承諾した団体からの情宣協力依頼について

総務担当木下理事より、他団体からの情宣協力依頼については「他団体からの広報協力依頼への対応に関する申し合わせ事項」に基づいて対応をしているが、より柔軟に対応できるよう、申し合わせ事項を一部加筆する案が提議された。審議の結果、満場一致で承認された。

第9号議案 その他（Zoom契約更新について／フォーム作成ツールの導入等）

・Zoom契約更新

総務担当木下理事より、NECネットエスアイを代理店としたライセンス契約を更新することが提議され、審議の結果、満場一致で承認された。

・フォーム作成ツールの導入について

財務担当室田理事より、各申請手続きにおいて、WEB上で手続き可能な申請フォームを導入する案が提議された。費用等も含めて審議した結果、まずは一年間導入することが満場一致で承認された。

IV. 報告事項

1. 2023年度会員動向

総務担当木下理事より、2023年度の会員動向について配付資料に基づき報告があった。

2. 第8期代議員選挙管理委員会からの報告

選挙管理委員会担当木下理事より、第8期代議員選挙の準備状況について配付資料に基づき報告があった。

3. 全国大会運営委員会からの報告

研究担当伊藤理事より、各行事の準備状況等について報告があり、その後、行事ごとにそれぞれ担当理事から詳細な説明があった。

4. 機関誌編集委員会からの報告

機関誌編集担当坪理事より、機関誌『社会福祉学』の論文投稿受付・審査および編集状況について報告があった。現在、次期査読委員の諾否確認を行っている。

5. 国際学術交流促進委員会からの報告

国際学術交流促進委員会担当の金子副会長より、本理事会後に予定されている日中韓三か国代表者会談および懇親会について、また、第71回秋季大会で開催される留学生と国際比較研究のためのワークショップおよび国際学術シンポジウムの準備状況について説明があった。

6. 学会賞審査委員会からの報告

学会賞審査委員会担当杉山理事より、10月14日(土)に第71回秋季大会開会式に引き続いて執り行われる学会賞授賞式について説明があった。

7. 研究倫理委員会からの報告

研究倫理委員会担当村山理事より、現在進行中の調査案件はないとの報告があった。

8. 広報委員会からの報告

広報委員会担当岩永理事にかわり総務担当木下理事より、学会ホームページの更新および多言語翻訳を行い、定期的に広報活動を行っているとの報告があった。

9. アーカイブ化推進委員会からの報告

アーカイブ化推進委員会担当元村理事より、学会史資料調査の第2弾を9月2日(土)―3日(日)に実施したとの報告があった。文書毎の保管期限の設定や永久保存の定義等について、検討する必要があることを確認した。

10. 研究支援委員会からの報告

研究支援委員会担当高良理事より、第71回秋季大会で実施予定のスタートアップ・シンポジウムの準備状況および当日のプログラム等を確認した。CS-NETサロンの第4回は関西地域ブロックの若手研究者・院生情報交換会と協力して対面での開催を検討している。

11. 学会のあり方検討会からの報告

総務担当木下理事より、2024年5月の定時社員総会で学会のあり方検討会からの報告をするため、3月の理事会までに報告書を作成し、提案できるスケジュールで作業を進めていく予定であるとの報告があった。

12. 地域ブロックからの報告

- ・北海道地域ブロック: 前回理事会以降、報告事項は特になし。
- ・東北地域ブロック: 前回理事会以降、報告事項は特になし。

- ・関東地域ブロック：2024年3月17日（日）に2023年度研究大会「女性支援と社会福祉学—婦人保護から総合的支援への転換」をオンライン開催する予定である。
- ・中部地域ブロック：前回理事会以降、報告事項は特になし。
- ・関西地域ブロック：前回理事会以降、報告事項は特になし。
- ・中国四国地域ブロック：第54回島根大会の午後に実施予定であったが、荒天により中止となったシンポジウムが、島根県社会福祉協議会によって開催された。
- ・九州地域ブロック：「九州社会福祉学」第20号（記念号）の特集内容・構成について、通常の投稿論文の掲載に加え、創刊に携わった方々による対談等の掲載を予定している。

13. その他（後援依頼、関連団体からの報告、他）

・後援（協賛）依頼について

総務担当木下理事より、過年度の実績があることから、3件の後援依頼に承諾したとの報告があった。

・関連団体からの報告

1) 日本社会福祉系学会連合

保正副会長より、加盟学会22団体宛に「コロナ禍における学会活動に関する調査」への協力依頼を行ったとの報告があった。後日、加盟学会に所属する会員向けの調査も実施する予定である。

2) ソーシャルケアサービス研究協議会

報告事項は特になし。

3) 社会政策関連学会協議会

杉山理事より、2024年3月に「学術の役割を考える」をテーマとし、シンポジウムの開催を検討しているとの報告があった。

4) 社会学系コンソーシアム

木下理事より、2024年3月9日（土）にシンポジウムの開催を予定しており、社会的孤立に関するテーマで検討しているとの報告があった。

5) 人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会：GEAHSS（ギース）

高良理事より、9月23日（土）に運営委員会が開催され、第7期会計監事として本会より高良理事が選出されたとの報告があった。

6) 人文社会系学協会連合連絡会

木下理事より、事務局担当学会として1年が経過したため、次の担当学会へ引き継ぐ予定であるとの報告があった。

7) 日本ソーシャルワーク教育学校連盟

空閑会長より、2023年12月2日(土)～12月3日(日)に第52回全国社会福祉教育セミナー2023 in 大阪を開催予定であるとの報告があった。テーマは「ポストコロナ時代のソーシャルワーク教育を考える～コロナ禍の経験からの学びと魅力ある教育の展開に向けて～」である。

議長は、議事終了を告げ、17時00分に理事会を解散した。

以上

2023年度第4回理事会報告

開催日時:2023年12月16日(土) 10:00~12:00

開催場所:一般社団法人日本社会福祉学会事務局(Zoomによるオンライン開催)

I. 会長挨拶

定刻となり、空閑浩人会長より挨拶があった。

II. 理事会開会宣言(欠席理事の確認)

出席者全員がオンライン参加によるWEB会議の開催に際して、音声に問題なく、出席者が一堂に会するのと同等の意思表示が互いにできる状態にあり、議事進行に支障がないことを確認した。

定款第42条に基づいて空閑会長が議長となり、出席理事および欠席理事を確認した。定款第43条に規定されている要件を充足したため、「2023年度第4回理事会」を開催するとの宣言があった。なお、定款第47条に則り、議事録署名人として空閑会長、大島監事、岡部監事を選出した。

III. 審議事項

第1号議案 入会審査

総務担当木下理事より、配付資料に基づき説明があった。審議の結果、14名全員の入会が満場一致で承認された。

第2号議案 2024年度業務委託契約について

財務担当室田理事より、2024年度業務委託契約書類について、配付資料を基に説明があった。審議の結果、2024年度業務委託契約が満場一致で承認された。

第3号議案 第9期役員候補者選挙管理委員の委嘱について

総務担当木下理事より、配付資料に基づき第9期役員候補者選挙管理委員会を設置するとの説明があった。「一般社団法人日本社会福祉学会役員候補者選出規則」第4条に基づいて、担当理事として木下理事、委員として正会員より4名の推薦があり、審議の結果、満場一致で承認された。

第4号議案 第71回秋季大会での研究発表への見解について

総務担当木下理事より、第71回秋季大会(於:武蔵野大学)での研究発表に関する問い合わせについて説明があった。審議の結果、提示された回答文案が賛成多数により承認された。

第5号議案 その他

特になし。

IV. 報告事項

1. 2023年度会員動向

総務担当木下理事より、2023年度の会員動向について報告があった。

2. 2024年度事業計画案および予算案の提出について

総務担当木下理事より、2024年度事業計画書および予算案の提出依頼があった。

3. 2023年度期中監査報告

大島監事および岡部監事より、12月7日に行われた2023年度期中監査について、配付資料に基づき報告があった。

4. 第8期代議員選挙管理委員会からの報告

第8期代議員選挙管理委員会担当の木下理事より、今回の投票率は全国が18.8%、地域が18.9%で、当選確定者が160名であったとの報告があった。

5. 全国大会運営委員会からの報告

研究担当伊藤理事より、各行事の準備状況等について配付資料に基づき報告があり、その後、行事ごとにそれぞれの担当理事から詳細な説明があった。

6. 機関誌編集委員会からの報告

機関誌編集担当坪理事より、機関誌『社会福祉学』の論文投稿受付・審査および編集状況について、配付資料に基づき報告があった。

7. 国際学術交流促進委員会からの報告

国際学術交流促進委員会担当の金子副会長より、第71回秋季大会前日の日中韓三か国代表者会談および懇親会、第71回秋季大会で開催された留学生と国際比較研究のためのワークショップならびに国際学術シンポジウムについて報告があった。

また、10月20日(金)～21日(土)に韓国済州島にて韓国社会福祉学会による社会福祉共同学術大会が開催され、日本社会福祉学会より3名を自由研究発表者として派遣したことを確認した。

8. 学会賞審査委員会からの報告

学会賞審査委員会担当杉山理事より、学会賞審査対象図書の推薦について配付資料に基づき報告があった。今回よりウェブ上で推薦申込ができるよう推薦フォームを用意している。また、各地域ブロック発刊の機関誌に掲載された優れた論文を審査対象論文として積極的に推薦するよう、あらためて各地域ブロックに対して協力要請があった。

9. 研究倫理委員会からの報告

研究倫理委員会担当村山理事より、現在進行中の調査案件はないとの報告があった。

10. 広報委員会からの報告

広報委員会担当岩永理事にかわり木下事務局長より、12月4日に「広報委員会だより」通算67号をメール配信し、最近の学会動向について会員への周知を行ったとの報告があった。現在は学会ニュース95号の発刊に向けて企画案を練っているところである。

11. アーカイブ化推進委員会からの報告

アーカイブ化推進委員会担当元村理事より、学会史資料調査の第3弾を予定しているとの報告があった。

12. 研究支援委員会からの報告

研究支援委員会担当高良理事より、2024年2月11日(日)に関西地域ブロック第55回若手研究者・院生情報交換会との共催で第4回CS-NETサロンを開催するとの報告があった。CS-NETサロンとしては初めてのハイブリッド開催とする予定である。

13. 学会のあり方検討会(基本構想委員会)からの報告

総務担当木下理事より、12月28日(木)に委員会を開催し、継続課題についての検討を予定しているとの報告があった。

14. 地域ブロックからの報告

- ・北海道地域ブロック:2024年2月10日(土)に研究会の開催を予定している。
- ・東北地域ブロック:機関誌20号を記念号として査読等の編集作業を進めている。
- ・関東地域ブロック:2024年3月17日(日)に2023年度研究大会の開催を予定している。
- ・中部地域ブロック:前回理事会以降、報告事項は特になし。
- ・関西地域ブロック:2023年度年次大会および総会は2024年3月2日(土)に桃山学院大学での開催を予定している。また、研究支援委員会との共催で2月11日(日)に開催する第55回若手研究者・院生情報交換会の準備を行っている。
- ・中国四国地域ブロック:地域ブロック発刊の機関誌に掲載されている抄録や論文等について、民間企業・組織が運営する論文検索サイトより掲載依頼があった際、地域ブロックの裁量により諾否の判断をしてよいことを確認した。
- ・九州地域ブロック:「九州社会福祉学」第20号(記念号)の査読・校正作業中である。

15. その他(後援依頼、関連団体からの報告、他)

- ・後援(協賛)依頼について
前回理事会での報告以降、後援依頼への対応なし。
- ・関連団体からの報告

1) 日本社会福祉系学会連合

保正副会長より、研究支援委員会による初期キャリアにある研究者のニーズ調査報告書を踏まえて、日本社会福祉系学会連合で調査の実施を計画しているとの報告があった。

2) ソーシャルケアサービス研究協議会

金子副会長より、2024年賀詞交歓会の開催準備が進んでいるとの報告があった。本会は昨年度と同様に不参加とすることを確認した。

3) 社会政策関連学会協議会

杉山理事より、2024年3月9日(土)に東洋大学白山キャンパスおよびオンライン配信にてシンポジウムの開催を予定しているとの報告があった。

4) 社会学系コンソーシアム

木下理事より、2024年3月9日(土)に「なぜ、社会的孤立は問題なのか?」をテーマに公開シンポジウムのオンライン開催を予定しているとの報告があった。

5) 人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会:GEAHSS(ギース)

報告事項は特になし。

6) 人文社会系学協会連合連絡会

報告事項は特になし。

7) 日本ソーシャルワーク教育学校連盟

空閑会長より、12月2日(土)―3日(日)に第52回全国社会福祉教育セミナーが大阪公立大学中百舌鳥キャンパスにて4年ぶりに対面開催され、盛会に終わったとの報告があった。

議長は、議事終了を告げ、12時00分に理事会を解散した。

以上

日本社会福祉学会事務局から

◆会費の納入はお早めをお願いします

平素より学会活動にご理解、ご協力を賜り、誠にありがとうございます。

皆様、2023年度の年会費のご納入はお済みでしょうか。皆様からお納めいただきました年会費は、学会活動を支える貴重な財源となりますので、未納の方は至急お納めくださいますようお願いいたします。

また、2021年度の年会費が未納の方は、『社会福祉学』の送付を一時停止させていただきます。会費納入を確認しましたら学会誌の発送を再開いたしますので、ご了承いただきますようお願いいたします。

これから納入される方で、銀行振込みによるご入金をお考えの方は、お名前の前に会員番号を入力してください。また、大学等のご所属先を通じてお振込みをされる場合は、学会事務局宛に①会員名、②会員番号、③振込日、④振込金額、⑤振込名義、⑥備考をメールまたはFAXでご連絡ください。

◆登録情報更新のお願い

お引越しや所属先の異動等により登録情報に変更のあった方は、学会ホームページの会員ページ「マイページ」より、以下の手続きが可能ですので、どうぞご活用ください。

①登録内容の確認・変更、②パスワードの変更、③会費納入状況の確認、④会員名簿検索

◆メールアドレス登録のお願い

本学会では会員の皆様への連絡手段としてメール配信を利用しています。メールアドレスの登録をされていない方は、メールアドレスの登録にご協力くださいますようお願いいたします。現在、メールアドレスを登録されていない方で、メールアドレスの登録にご協力いただける方は、学会事務局<office@jssw.jp>までご連絡ください。

また、会員ページ「マイページ」にログインされる際のパスワードをお忘れの場合、会員番号と登録されたメールアドレスによりWEB上でパスワードの再設定が可能です。ぜひ一度ご確認ください

◆長期会員申請の受付についてのご案内

2024年度からの長期会員申請の受付を開始しました。申請条件を全て満たす正会員のうち、長期会員となることを希望する方は、所定の手続きを行うことにより会費の減額措置が適用されます。

学会ホームページにて申請方法、注意事項等の詳細をご確認のうえ、所定の申請フォームよりお手続きください。

2024年度の申請期間は2024年1月1日(月)～2024年3月31日(日)必着です。

編集後記

学会ニュース第95号をお届けいたします。空閑会長の年頭所感にもありました通り、2024年は大変な幕開けとなりました。能登半島地震の発生から1ヶ月経ちましたが、被害の全容ははまだ見えず、二次避難という言葉もすっかり定着しました。被災地域は地縁の深い地域でもあり、福祉に携わる者としてコミュニティの維持と再生に尽力しなければならないと感じています。また、全国にある高齢化率の高い地域の日常生活圏で、災害時の備えの必要性を改めて感じました。

今号では、韓国社会福祉共同学会大会で研究発表された佐々木隆志会員、門下祐子会員、張思銘会員から報告をいただきました。福祉政策に違いはあれ、福祉的課題に共通点の多い日中韓3か国の研究者がこれからも交流を深めていくことが重要だと感じました。地域ブロック情報では関西地域ブロック、中国・四国地域ブロックから報告いただきました。シリーズ【日常から離れて】は木下武徳先生にご寄稿いただきました。外見的特徴に現れないルーツの話は大変興味深く拝見しました。多様性、多文化共生が言われるようになってだいぶ経ちますが、日本でも人種的多様性は想像以上に豊かなのかもしれないと思わせる内容でした。

さて、日本社会福祉学会は今年設立70周年を迎えます。これからも学会運営に皆様のご協力をお願いいたします。

大澤 朋子(実践女子大学)